

埋め草（増補版）

うめ・くさ【埋め草】
新聞や雑誌の余白を埋めるための短い文章のこと。往々にして体裁を整えることに主眼が置かれ、内容的にはその場のぎに流れることがある。『芥川だより』のレイアウト調整に際して、随時に差し挟んだ記事を並べてみる。

目次

節分	3
初夏の吉野山	5
記憶の河原町	9
夏祭り	11
気持ちいいと感じる曲	13
ある訃報	15
ジャンク・サイエンス	18
驚天動地	21
落語ブーム	23
仮想通貨	25
虫の声	27
アドベント・カレンダー	30
元号予想(1)	35
元号予想(2)	39

節分

今日では二月三日に固定されている節分。最近の風潮でいえば、恵方巻の丸かぶり話題に挙がるが、これはどうやらビジネス戦略的な色合いが濃いようだ。諸説あるとのことだが、元々は船場の旦那衆らが始めた遊びだったとか。そんな遠い昔の遊びをことさらに掘り起こして、いわゆるありげな風習であるように喧伝する、その裏にあるのは、当然ながら寿司業界の目論みということだろう。近年のケースではコンビニ業界が積極的に旗を振っている感があるが、根っこは変わらない。

そうした「つくられた風習」たる裏話を小耳に挟むと、同時に頭を去来するのはバレンタインデーである。思えば二月十四日に女性が男性にチョコレートを贈る風習だった業界の目論みから生まれたものだろうし、古くは七月末の土用の丑にウナギを食べるというのも平賀源内が仕掛けたうなぎ屋のための販促戦略だったらしい。ともかくにも人は昔から似たようなことをしているのである。

ところで、土用の丑といえれば七月末に固定して考えがちなのだが、正確には春夏秋冬、季節の

変わり目に土用はやってくる。七月末の土用は夏から秋へ移り変わる期間であり、その間に訪れる丑の日が、いわゆる「土用の丑」である。

そして、同じように節分というのも、春夏秋冬それぞれの始まる日の前日になるわけだから、厳密にいえば一年に四度めぐってくる計算になる。春の始まり、すなわち立春の前日が暦の上でいう一年の始まりなので重視されているまでのことである。

実際の話、現代人は旧暦にしたがって社会生活を営んでいるわけではない。節分といっても神社でのイベントが何やら盛り上がっているわけでもない。節分といっても（たいだから）気に掛けるまでであって、大晦日や元旦のような重みは感じない。そこに加えて、実は節分は一年に四回あるんですよとなると、その昔、某テレビ番組でやっていた「水戸黄門は七人いた！」というネタを聞かされてみたいで微笑ましくもなる。

初夏の吉野山

先日、奈良県の吉野を訪れる機会があった。四月の上旬であれば、観光客でごったがえして普通に歩くこともままならない場所なのだが、さすがに時季を外しているせいだろう、観光客とおぼしき人影を見かけることはほとんどなかった。観光客相手に商売をしている店々も軒並み戸を閉ざしているところを見ると、訪れた日がたまたま人の出の少ないタイミングだったとかではなくて、やはりシーズンオフの為せる業らしい。風景的に見どころがあっても人が多すぎると煩わしくなるものなのだが、逆に少なすぎるとどことなく物足りなさも感じてしまう。実際の話、桜が満開時の眺めは目に焼き付いていて、記憶の中の景色と眼前に広がる実景を比べるだけでも、見劣り感と言うに及ばない。そういう意味では、ただ単に、黙々と吉野を歩いてきましたというだけの訪問となった。

もっともこの日の目的はそれだけではなかった。吉野の観光街を訪れるにしてもコースがいくつかある。今回はいままで試したことのないアプローチから吉野に入ってみたのである。一般的に知られていて、広く利用されているのは、近鉄吉野線で吉野駅まで入り、そこからケーブルやシャトルバスを利用して中千本や上千本に入るといものだろう。このパターンでも上千本までくると高所から山一面を覆う桜を眼下に収めることができるので見応えという点では抜群である。そして気合の入っている人なら、交通機関で登れるところまで登ったあと、奥千本をぐるりと廻ってくるということもやっているはずである。

一方、自分の足を使って歩いて吉野を堪能しようと思うのなら、吉野駅まで入るのではなく、大和上市駅で降車、そこからバスで宮滝にはいつて北側のハイキングコースを使うのがお奨めである。前述の西側コース（観光街コース）は桜シーズンには驚異的な混雑ぶりを見せるので、その中をハイカースタイルで登るのは気が引けるどころの話ではないし、それ以前にアスファルト道を延々と登り続けるのは、正直いつて苦痛以外の何物でもない。そんなことをするくらいなら、人混みを避けるだけでなく、歩く雰囲気も楽しめるハイキングコースを選ぶべきだろう。宮滝から上千本に突きあげるハイキングコースは、そうした希望を叶えてくれる。それに山道の風情というに留まらず、奈良時代に持統天皇が柿本人麻呂らを引き連れて何度も訪れていた景勝地であるという歴史的な感興も刺激してくれる。そんなコースなので、私の場合、吉野を訪れるのはほとんどこの宮滝コースを利用することとなっている。

さて、ここからが本題なのだが、この宮滝コースとは別に、吉野に入るもう一つのコース、それが東側の西河から入るコースである。宮滝コースと同じく、大和上市駅までは近鉄電車を使う

ことになるのだが、そこからのバスは宮滝を通り越して川上村の西河という集落まで入る。この西河を起点とするコースがあることは以前より知ってはいたのだが、実際に歩いたことはなかった。それでこのほど一念発起、東側からのアプローチを試みたわけである。観光街でさえ他の人と出逢うことが少ない時季なのだから、ハイキングコースの中でもよりマイナーな東側コースになると、人っ子ひとりいないありさまである。起点となる西河には「蜻蛉の滝」という観光物件があるので、訪れている人もちらほら程度ながらいるにはいたのだが、滝を越えて山道に入ったあとは全くの一人歩きである。コース自体は、宮滝コースほどの深みがあるわけではなく、淡々と山道を辿るだけのものだったが、山頂（吉野山の最高地点、青根が峰）に突きあげる稜線に合流する近くでは林道工事の関係から周囲の木々が伐採されており、遠く大峰方面の山並みや吉野川上流の大迫ダムなどを視界に収めることができた。山の中でいきなり太い林道に出合うのは興ざめとなるケースが圧倒的に多いのだが、この時のものはそれなりのお楽しみはあったといってもいいだろう。

山頂の青根が峰は鬱蒼とした木立の中で、三角点の周辺だけが開けているといったところ。山頂らしい感興など微塵もなく、単なる休憩ポイントか通過点の一つに過ぎない。これは宮滝から登ってきた時も、表の観光街から登ってきた時も同じことであり、一応ご挨拶程度の意味合いで踏んでおきましようというぐらいにしかならない。今回のような東側からのアプローチになると、

行程の途中に青根が峰がくみ込まれるので、否が応でも山頂を踏むことになるのだが、宮滝や観光街からやってくる場合は、山頂を省略して金峯神社で折り返すこともある。

ところで、今回の吉野探訪は季節はずれの試みでもあった。吉野の魅力が存分に味わえるとなれば、やはり春をおいて他にはないのだが、あとは桜の木々が紅く染まってくる秋であったり、これは試したことがないのだが雪の吉野だろうか。吉野の観光協会も夏場をシーズンオフにしてしまうのではなく、なんとか集客できないものかとの思いからなのか、七曲がり（観光街の一部、ケーブルの下）には紫陽花を植えて六月の中旬から七月にかけて「あじさいまつり」と銘打った企画を行っている。今回の吉野散策では七曲がりの紫陽花もまだ二分咲きにも行っていない状態ではあったが、七曲がりを埋め尽くす形で花を咲かせるとかなりのボリュームになることは想像できる。そうすると、夏の吉野を売り込む一つのアイテムにはなるはずである。

記憶の河原町

八月中旬、長らく改築工事をやっていたBAL（京都・河原町通のファッショビル）がリニューアルオープンとなった。かつてのBALは、河原町界隈での待ち合わせ場所によく利用されていた。建物が大きくて目立っていたことに加えて、河原町通に面した入口が限られていたので、ひと言「BAL前に集合」というだけでピンポイントの場所指定となったからである。三条京阪の「土下座前」（高山彦九郎の銅像前）と並んで、二大待ち合わせスポットだったわけである。

携帯電話が当たり前になってからは待ち合わせのスタイルも様変わりしたらしい。場所の指定などは、大雑把に〇〇駅前とかいった程度でしか行わず、現地に到着してからお互いがどこにいるかを確認しあって落ち合うのだそうだ。このスタイルに馴染んでいる世代にすれば、少し想像しづらいかも知れないが、かつての待ち合わせは、前もってかなり厳密に場所と時間が決められていた。実際、そうでもしておかないと合流ができなかったりするからだ。そんな環境のなか、「BAL前」というだけで事足りたこの建物は、河原町のランドマークでもあった。それだけに、三年前にBALが閉店となった時には、さすがに一つの時代が終わったんだなと思わせたもので

ある。

ところで、BAL閉店に先立って、もう一つ、河原町界隈に時の流れを感じさせる出来事があった。それが二〇〇五年の丸善閉店である。京都の丸善のイメージを十人に訊ねると半分以上は梶井基次郎の小説『檸檬』を持ち出すに違いない。この作品が国語の教材として長く採用されていたがための現象だが、そんな事情があるにしても、『檸檬』の丸善は、河原町界隈の、ひいては京都の風景の一つでもあった。そしてBAL同様、丸善のビルもかつての河原町通ではそれなりの存在感を持っていたので、丸善が消えてBALが消えてとなると、河原町がかつての河原町ではなくなると、昭和の京都を知っている人たちは感じていたことだろう。

さて、そんな前史をふまえてのBAL復活である。しかも新生BALには、地階にテナントで丸善が入っている。丸善という書籍販売業者に愛着があるわけではなく、強いていうのなら、丸善という響きの向こうに微かに浮かんでいる梶井基次郎の世界、ないしは昔の河原町に思い入れがある程度である。そういう意味でいえば、新生BALの新生丸善はまったくの別物なのだから、集客の演出で『檸檬』風のディスプレイをしたところで響くものは何もない。ただそれでも、河原町に丸善という名前を持つ空間が帰ってきたことは歓迎しておきたい。

夏祭り

夏は祭りの季節である。大阪の天神祭、京都の祇園祭、東京の神田祭が日本の三大祭りと呼ばれるが、このうち天神祭と祇園祭は、関西の夏を彩る風物詩である。そこで、夏に祭りが多い理由を調べてみると、季節の変わり目に豊穰を祈念する云々との解説もあるが、こと天神祭と祇園祭に限れば農事との結びつきは薄い。

大阪天満宮の天神祭は、創建当時に行われた神事が発展したものだというし、八坂神社の祇園祭は疫病調伏の行事が起源である。現代目線に映る姿と発祥の由緒との間での関係性を安易に言うのは控えるべきだが、農業暦との関係で一般論風に説明するのは違っていきそう。そもそも、季節の変わり目というだけでは、なぜ夏かということの説明になっていない。

それに対して、一つの案として浮かぶのは「夏祭り」という括り自体が実は根拠のない幻なのではないかという見方である。日本の三大祭りのうちの二つは夏祭りかも知れないが、後の一つは夏ではない。三分の二程度なら多いとはいえないし、三つのうちの二つという偶然で片付けられる数字である。つまり「夏は祭りの季節である」というところからして思い込みなのではない

かということである。「冬祭り」や「春祭り」という言葉は熟していないのに対して「夏祭り」は十分に市民権を得ているが、歴史的な根拠については考える余地がありそう。



気持ちいいと感じる曲

とあるニュースによれば「人が気持ちいいと感じる曲トップ一〇」が「発見された」らしい。このニュースが面白いのは、人気投票の結果ではなく、科学的な根拠を添えている点である。調査はフローニンゲン大学（オランダ）のジェイコブ・ジョリジ博士によるもので、博士によれば、一分間に一五〇回ビートが打たれるハイテンポさ、長三度（メジャーサード）、ポジティブな歌詞が鍵になるのだそうだ。

科学的どうこうと仰々しく持ち上げるよりは、イグ・ノーベル賞的なネタとして笑っておきたい気もするが、「気持ちいい」という主観的な要素を、客観的なパロメータで示そうとしているところがミソである。もつとも歌詞のポジティブさは数値化できない主観の領域なので、条件は一五〇ビートと長三度の二つだけになってしまうのだが。

というわけで一五〇ビートと長三度なのだが、これらはどんな条件なのだろう。前者はドラムのビートが毎分一五〇回程度のテンポのことなのか、それとも一五〇回オーバーが条件ということなのか。長三度に至っては音楽理論のイロハも知らない者にはイメージもできない。もとより

楽器に触れることもないので、丁寧に教えてもらったとしても頭には残らないだろう。

それはさておき、「気持ちいい曲」の栄えある一位に輝いたのは何かというと、クイーンの「ドント・ストップ・ミー・ナウ」だとか。歌詞が基準に入っている時点で、歌詞のない曲と非欧米語圏の曲が除外されることになるが、笑い話にツッコミを入れるのも大人げない。それより、人を「気持ちよく」させるナンバーワンが「ドント・ストップ・ミー・ナウ」だと受け入れておいた方が話は進む。とはいえ、聴いてご機嫌になれる曲なのは確かだが、最初から除外された範囲が圧倒的に大きいから、「それで？」と反応するしかない。あるいは「ドント・ストップ・ミー・ナウ」が選ばれるのなら、あの曲は？、この曲は？といった形で代替品は無数に挙がってくる。おそらく、そこで一五〇ビートと長三度が意味を持つのだろう。ともあれ大学教授の研究ということで相応の体裁をとって発表されたに違いないし、肩書きのためか、もつともらしく聞こえてしまうのだろう。こちらから言い添えることは何もない。

ところでわが日本の歌謡曲も視野いれると、どうだろう。一五〇ビートと長三度なのかどうかは知らないが、ハイテンポで耳触りもいいというのなら、「青い山脈」は外せない。古すぎると侮るなかれ、藤山一郎のオリジナルだけでなく、吉永小百合版、美空ひばり版、森昌子版、錦ひろし版など百花繚乱なのである。とあるTV番組ではAKBの女の子たちにも歌わせていたのだから（かなりの失笑モノだが）、世代を超えてカバーされ続ける名曲と言っていだろう。

ある訃報

正月早々、びっくりするニュースが飛び込んできた。デビッド・ボウイの訃報である。ロック・アーティストには、一般的なファンとは別に、「信者」とでも呼ばねばならないコアな支持者もつ人々がある。デビッド・ボウイは、まさにその一人だろう。私自身がその信者層に入るかどうかというと、これは明快にNONである。そこまで信奉しているわけでもないのだが、デビッド・ボウイに信者層がいることは重々心得ている。だからこそ訃報に接したとき、これは大きなニュースだと感じたのである。

個人の話をするのなら、実はデビッド・ボウイに対しての関心はあまり動かなかったのだが、一ファンを越えた信者というのなら、私の場合はジョン・レノンがその対象だった。だからこそ一九八〇年十二月九日のニュースに接した時には茫然としてしまい、翌日の期末テストでほぼ白紙の解答用紙を提出して教師たちを慌てさせた（ちなみに、ジョン・レノンの命日は現在では、全世界共通で十二月八日と記されるが、これはアメリカ時間をユニバーサル仕様になっているに過ぎない）。

信者にしてみれば、信奉の対象がいなくなることはそのくらいに大きなことなのだが、今回のデビッド・ボウイの件でも恐らくは茫然と立ちすくんでしまった人たちが少なからずいるに違いない。

さて、そんなデビッド・ボウイ、今回の訃報に接してあらためてベスト・アルバムを聴いてみた。「ジギー・スターダスト」や「スターマン」などには微妙に感じるところはあるが、七〇年代後半からの楽曲にはさほど反応できないのは、たぶん私自身が信者ではないからなのだろう。そんななか、ふと耳がとまった一曲があった。それが「アラバマ・ソング」である。この曲は、どこか頹廢的な雰囲気漂わせるドアーズの歌として知っていた。ドアーズの代表曲という「ハートに火をつけて」になるのだが、個人的にはそれ以上に「アラバマ・ソング」の方に惹かれていたので、ドアーズの代表曲「アラバマ・ソング」という形での認識となっていたのである。それがデビッド・ボウイもシングル曲として歌っていたことを知り、やはりあの歌は名曲だったのだとほくそ笑んだのである。

ところが、いい気になつていたのもそこまでだった。デビッド・ボウイも歌っていたことから、あらためて調べてみると、ドアーズのオリジナル曲でもないということが分かったのである。ドイツの劇作家ブレヒトの戯曲「三文オペラ」（一九二八年）の劇中歌であり、クルト・ヴァイルの手によるものであるとのこと。

この落胆は、喩えていえばこんな感じになるのかも知れない。誰でも知っているアイドル歌手がとある歌をヒットさせたとする。ところが、その歌は七〇年代の歌謡曲全盛時代に、某新人歌手がアルバムの曲数を揃えるために歌っただけで、何の話題にもならなかった歌の焼き直しだった。その七〇年代の歌のことを、たまたま知っていたことで得意がっていたのだが、少し調べてみたところ、その歌は実は戦前の佐藤千代子か藤山一郎の持ち歌だったという事実が突きつけられた時のようなガツカリ感……。

ともあれ、煮え切らないオチがついてしまったわけだが、ドアーズの歌う「アラバマ・ソング」が名曲であるとの考えは変わらない。

ジャンク・サイエンス

死後の世界、地球外生命体、失われた古代文明等々、これらのトピックは何かと人心を刺激しやすい。カナダに住む十五歳の少年が、独自の理論を用いて、マヤ文明のまだ知られていない都市遺跡を発見したというニュースは、燎原の火のごとくネット界限で拡散された。しかも、驚きと賞賛をもって拡散された直後に、発表された内容に対する信憑性が取り沙汰されたり、そうした反論を僻みやつかみによるものだとするブーイングが起きたりと、いろんな意味で騒々しいこととなっている。

いくつかの問題が絡み合っているようなので、流れの整理をしておく、新発見のニュースが最初に駆け巡ったのは五月八日のことだったようだ。「ケベックの十五歳が、衛星写真とマヤの天文学と彼の直感を用い、マヤ文明の都市の位置に関する謎を解決、さらに新しい都市遺跡を発見した」という書き出しで速報が流された。このニュースに多くの人が飛びつき、十五歳の偉業は一両日中にインターネットを介して世界中を駆け巡った。

このニュースが世間の耳目を引いたのは、主体が十五歳の少年だったこと、発見に到るプロセ

スがまったく独自のものだったことなどの要素が少なからず絡んでいるようだ。既存の手法に則った蓋然性の高い推測に基づく発掘調査を高名な考古学者が行った末に発見されたのであれば、これほど話題にはならなかったと思う。それだけに、今回の発見をジャンク・サイエンスと呼んで冷静な対応を呼びかける専門家の声も、一部の熱すぎる応援者に掛ければ、専門学者の偏屈と縄張り意識によってロマンと若い才能が圧殺される構図であるかのように吹聴されている。

確かに「発見」とは言いながら、衛星写真に捉えられた人為的構造物めいたものの影が指摘されているに過ぎないし、「独自の手法」にしても、マヤ文明で用いられていたとされる星図の信憑性が疑問視されるのであれば、結局のところは数ある仮説の一つに過ぎない。信憑性の高い低いを問わないのであれば、この手の仮説は掃いて捨てるほど提出されているはずだ。

もちろん、独自の勘と信念によってトロイの遺跡を発見したシュリーマンのような事例もあるのだから、ハナっから一笑に付するのはよくない。しかし、だからといって、熱すぎる応援者のように学者は偏屈なものと決めつけてしまうのも、裏返しの偏屈さが発露されているにすぎない。大衆向けの科学誌である「ニュートン」の編集部も今回の騒ぎには一枚加わったようだが、公式ツイートでは「元ニュース記事やカナダ宇宙庁の Tweet などでも確認できたため、ガセネタではないと判断し、紹介しましたが、真偽を見分けるのはとても難しいものです。また進展がありましたら、追って報告致します」という形での幕引きを図っている。

ともあれ、今回の一件は大衆受けしやすい要素がてんこ盛りのシチュエーションだっただけに、外野が過剰に騒ぎすぎたケースと見ておいてよさそうだ。日本の科学畑でも似たようなことが最近起きたように記憶しているが、それはさておき、調査隊を送ることもできないとされるジャングルの奥が発掘の対象となった時、この十五歳の仮説が予言として脚光を浴びたとすれば、それはそれでまた別なドラマになるに違いない。



驚天動地

「驚天動地」という言葉がある。世の中があつと驚く大事件に対して使われる言葉の中では、ポピュラーな部類だろう。出来事の突発さを強調する時は「青天の霹靂」がある。ただし、出来事を突然と思うか否かは個人と捉え方なので、どちらかと言えば個人的な驚きに対して使われることが多い気がする。それに比べると「驚天動地」は、天空を驚愕させ大地を震動させるわけだから、万民に対する大事件である。

今年のノーベル文学賞は、ボブ・ディランへの授賞と報じられた。このことは、個人的にはまったく予想してなかったことが現実になったという点では大きな驚きなのだが、予想屋のノミネートにはディランの名前は数年前から挙がっていた。その手の予想は、村上春樹があれこれ取り沙汰される類いのものなので、「へえ〜」とか「ふ〜ん」といった生暖かい眼差しを送るだけで、そこにボブ・ディランの名前を見た時も、いい加減なことを言っているなと思っただけで、それだけに今回の決定を「青天の霹靂」と思ってしまったのである。

こうした流れで、紙面の埋め草でボブ・ディランの話をやってみようと思っていたのだが、「青天の霹靂」に対する「驚天動地」が起きたものだから、驚きの区別という話題にスライドさせてみる。その事件とは、言うまでもなく米国大統領選挙の結果であり、もはや啞然とするしかないというのが素直な感想である。EU離脱を決めたイギリス大衆も大概な気がするが、アメリカ大衆も思い切った選択をやってくれるものだ。

ちなみに「驚天動地」という四字熟語の出自だが、白楽天の律詩「李白墳」だとか。そこでは亡き李白を称えて「かつて有り、驚天動地の文」という句がある。解釈すると、天地を感動させる優れた文章という意味だから、古今集の仮名序がいう「力をも入れずして天地を動かし」に近い。これが比喩的な使われ方でなく、字義通りに天地が崩れるかのような印象で捉えるのが、現代ふうに使われている「驚天動地」である。どの段階で捉え方の変容が起きたのかは分からない。

落語ブーム

京都の新京極に「かねよ」という鰻屋がある。シラスウナギの高騰がニュースになるご時世なので最近のご無沙汰している、という以前に、そんな話が取り沙汰される前からもほとんど入ったことはなかった。とはいえ、皆無ではない。これはパチンコなどであぶく銭が入った時に贅沢をしたとかではなく、「かねよ」で鰻を食べねばならない必然的な理由が存在していたからである。

というのは、この店は二階大広間で月イチの寄席を開いていて、鰻井の料金と同額の木戸銭を設定しているのである。したがって寄席の日には、鰻井の代金で鰻井十落語三席が堪能できる仕組みになっていて、落語に鰻に付いてくるのか、鰻に落語が付いてくるのか、区別のできないサービスを行っているのである。食材の高騰に歩調を合わせて木戸銭も二三〇〇円に値上げされたが、落語三席と鰻井の値段と考えれば十分に安い。

その「かねよ寄席」に数年ぶりに入ってみた。最近は、嘘かまことか、落語が若い人たちの間でもブームになっていると聞く。声の大きなメディアが「××が人気」と繰り返すことで本当に火が付くということもあるので、その手の話題にはマユツバで臨むようにしているのだが、四々五十人も入ればいっぱいになる大広間には、グループでやってきたとおぼしき大学生を始め、若い人たちが少なからず見受けられた。落語ブームなるものはあながちのフェイクニュースではなさそうだ。

その日の演者は、桂りようば、桂歌之介、桂米二。演じられたのは「強情炎」「四段目」「茶の湯」の三題。時代背景などが理解できていないと面白みも半減しかねない演目も混じっていたが、仕草や表情で笑いを取るあたりは、さすがに話芸のプロである。とはいえ、歌之介が演じた「四段目」は、若い人たちにはとりわけ難しい部類だったようだ。そもそも丁稚なる存在がどういものかわかっていないと話の世界に入れないし、落語の中で再現される忠臣蔵の舞台についても、台詞がわからないのを含め、相応の知識がないとトンチンカンになりかねない。幸いなことに、こちらは塩治判官とか力弥とか由良助と聞けば、説明なしで人間関係もわかるのでシチュエーションの把握はできたが、展開について行けずポカーンとなってしまった人もいたのではないか。ともあれ、落語なるものは筆録された台本を読むだけでは面白みはまったく伝わらないし、テレビやDVD等の映像媒体でも十分ではない。話芸が演じられる場の空気が笑いの雰囲気呼び起こしているのである。そういう意味では、「かねよ」はナマの話芸を間近で見せてもらえる貴重な場所である。毎月は難しいにしても、余裕のある時は足を運びたいものである。

仮想通貨

このところ仮想通貨ビットコインをめぐる話題が世間を賑わせている。国家による保証を背景に運用される法定通貨とは異なり、利用者が信用を付与することで成り立つのが仮想通貨である。前者が地域国家の経済状況によって価値を変動させるのに対して、後者ではそれが変動要因になるわけではない。このことは仮想通貨が国境を越えた決済を容易にしうる根拠として挙げられる点である。しかし、世の中を騒がせている仮想通貨はそんなパラダイスの側面が取り沙汰されているわけではない。

仮想通貨の利用者が顔見知りの仲よしコミュニティならそれこそ子ども銀行券でも仮想通貨たりうる。だが昨今のケースは不特定多数による利用が可能になったがゆえの事象なのである。国家や法人など第三者による保証がないのなら、通貨の価値は利用者の共通理解に依存する。顔見知り同士の善意によってそれが行われるのが子ども銀行券だとすれば、システム（プログラムによる定義）によって可能にするのがビットコインなどの仮想通貨であると理解しておけばいいだろうか。先月来、話題になっていた「ビットコインの分裂」とは、このシステムの変更が行われ

ることによってどのような影響が生じるのかということであった。結果は、ビットコインではない、ビットコイン・キャッシュなる新しく生成される仮想通貨の信用が、いまのところは様子見の状態になっているようだ（対日本円の価値でいえばビットコイン対ビットコインキャッシュが約一〇対一）。

実は、半年ほど前にビットコインではない、別の仮想通貨の購入を勧められたことがあった。その時の話の内容が、一年後には必ず儲かるよといった調子だったので、酒の席での笑い話にしておいたのだが、利用者が増えればそれに応じて信用すなわち価値は騰がることになるのだから、勧める側の論調がネズミ講っぽくなるのは致し方ない。一般的なニュース番組でもビットコインがとやかく言われるようになってから少し調べてみたのだが、半年前の段階で手を出していたならいくらかは儲かっていたのかも知れない。そうしたことも踏まえた上でいうのなら、もしこれから仮想通貨に手を出そうと思う人がいるなら、現状では投機的な色彩が強くなっているので、まずはスつても構わない範囲でのつきあい方（パチンコや競馬など他のギャンブルと同じ）にとどめておくのがベター、ということである。

虫の声

かなり以前の話になるが、こんな話を聞いたことがある。なんでも人類のほとんどの民族は「虫の声」を認識しないのだとか。詳しくいうと、脳科学の分野における研究成果らしく、虫が出す音に対する処理が、日本人とポリネシア人は左脳で行われるのに対して、他の大多数の民族は右脳で行われているという話である。左脳が言語や論理などの知的活動を司り、右脳が感覚を司るところから、虫の出す音を左脳で捉える日本人とポリネシア人はそれを「声」と聞き分け、他の民族は「雑音」と受け取るのだそうだ。そこから、日本人が繊細に聞き分けるさまざまな虫の声であっても、外国人には聞こえないという現象が起きるのだという。これは、外国人の場合、虫の発する音が音量的に不快とまらない限りは意識の領域に上がってこない、すなわち認識できないということなのだそうだ。

さらに興味深いのは、虫の音を左脳で処理するのは人種によって先天的にもたらされる生理現象ではなく、日本語を習得する過程で培われるという点である。したがって、父母が日本人でなくても幼い頃から日本で生活して日本語を生活言語として使っていると、虫の出す音を「声」と認識し、微妙な違いを聞き分けるようになるらしい。このことは逆もまた然り、日本人の父母から生まれた子どもでも英語等の欧米語を生活言語として育つと、虫の声に対する認識力は養われないのだそうだ。

この話を初めて聞いた段階では日本文化の繊細さを非常に誇らしく思ったものである。しかし、言語の違いが生理現象に現れるということは、視点を少し変えれば、それぞれの言語には異なった得意分野があるという話になる。つまり、虫の声だけを取り上げて繊細さを強調するのは、事象の片面だけを喧伝する独りよがりすぎないということである。欧米系の言語は、虫の声を認識する点では劣っているかも知れないが、日本語が苦手とする特長が何かあるはずである。たとえば、主語を明示することによって常に動作主体をはっきりさせる点などは、その一つだろう。

今回の文章では、ここまで「私」という一人称を示す単語は一度も使っていない。虫の声云々については、私はこう考えているという趣旨で書き進めているのだが、あえて「私が思うには」とか「と私は考えている」とか書かずとも意旨は通じるからである。これを仮に英語で書くとしたら、一文ごとに主語を添えていかねばならない。このことは、欧米系の言語は動作主体を明確するという点に特長があり、そのことは個々の覚醒を促し、個人の責任意識を醸成することに秀でていると評価することができる。

アメリカ合衆国が訴訟大国であるのはよく指摘されることである。日本に紹介される事例は、

ネコを電子レンジで乾かそうとしたら死んでしまった、キャビネットにネコを入れるなど製品マニュアルに書いていなかったからメーカーの責任を問うといった類いのものが多く、どちらかといえば茶化されがちなのだが、訴訟が頻発するのは、些細なことを含めて、あらゆる事象に対して責任意識が先鋭な文化であることの証しである。なにごとくも全体のせいといった形でうやむやにしたり、不都合なことを黙して一人で抱え込むことに美徳を見いだしたりすることはあり得ない。和を以て貴しとする日本人にすれば、文化的あるいは歴史的な土壌が違いすぎて笑い話になる部分だけをつまみ食いしてしまうのだが、事象に対する責任意識が発達しているがゆえにもたらされた成果も多い。

確かに、些細なことを取り上げて、こと細かに責任を問うのが標準になると雰囲気ガズギズしてしまうのは事実だろう。だが、それも鏡の背面のようなものであり、責任意識の伸張がもたらすところのメリットとデメリットである。虫の声を繊細に聞き分ける日本人のケースにしても、聞き分けることができるばかりに、西洋人なら煩いようなない神経症に悩む可能性があるかも知れない。だとすれば、それは麗しく繊細な感性にも、背面が存在していることを意味している。

アドベント・カレンダー

日本ではもともと馴染み薄なものになぜか大きく注目されるイベントがある。十月三十一日のハロウインのことだ。祝祭本来の意味には目もくれず、仮装パーティーの側面だけがクローズアップされる現状については批判も少なくないが、仮装をまとって街に繰り出す若者にすれば楽しければそれでよし、場を提供する業者にすれば儲かるんだから結構毛だらけ猫灰だらけというのが本音のようだ。確かに仰せの通りであって、街の器物を破壊したり、ゴミを散らかしたりなどがないように気をつけてくれるなら、ご自由に楽しんでくださいと言わなければならない。

それに日本的ハロウインに対して文句を言うなら、同じ目線でクリスマスやバレンタインズ・デーについても小言を並べる必要がある。クリスマスなどは時間的な積み重ねがあつて日本の風習に同化していると弁護するとすれば、ハロウインも数年数十年は様子見をするべきだ。そして定着したかどうかを判断してから物申しても遅くはない。いずれにせよ、現状の日本風ハロウインに対しては違和感を覚える部分が多いかも知れないが、それはそれとして流しておくしかない。ということ、ここからが本題、もともとは日本のものではないイベントについての話である。

クリスマスが大切な年中行事として根付いているキリスト教文化圏では、十二月になった段階で使用されるカレンダーがあるという。アドベント・カレンダーと呼ばれるもので、それが今回の主役である。

十二月一日から二十四日までの二十四日間を数えるように設定されているのがアベント・カレンダーで、宗教的な意味合いを言うのならキリストの降誕日をカウントダウン形式で待ち望むというところらしい。降誕日に先立つこの期間をアドベントと呼び、その名前を冠しているところからも分かるように、本来は宗教色の濃いアイテムのだが、一般的には子供向けのクリスマス・グッズとして使われることが多いそうだ。カレンダーの上には十二月一日から二十四日までの各日に対応するポケットが並んでいて、それぞれにはキャンディーやチョコレートなどが入っている。そのポケットを一日に一つずつ開けていき、二十四個のポケット全てが開くと本命のクリスマスプレゼントが貰える日になるというわけである。

西洋の祝祭から本来の宗教性を取り除いて、一過性のイベントを楽しむのが日本の受容だとすれば、降誕日を三週間以上先から待ち望む習慣自体、まどろっこしい。しかし、アベントそのものをイベント化する発想なら、いくらかは楽しめそうだ。その一つが、WEB版アベントカレンダーである (<https://adventar.org>)。

これは十二月一日から二十四日まで一日一本ずつ記事を投稿することのできるプログラムで、

設定されたテーマに即する話題を参加者（複数でもいいし、一人でも構わない）が並べていく。

WEB上の記事を日付に関連づけて整理する点ではWeb・Log、つまりブログと呼ばれるシステムと同じのだが、標準的なブログと異なるのは、それぞれの記事が指定日にならないと公開されない点である。額面通りに、その日になって新しく記事を作成するのでもいいし、前もって用意しておいたものを投稿しても構わない。あるいはWEB上の既出記事や非公開記事へのリンクを所定の日に公開するということもできる。

ここで注目したいのは三つめのパターンだ。リンク機能を用いて公開する記事を調整するというのは、工夫次第では二十四日すべての内容を予めの計画に沿って配置することになるので、日次に従ってイベントが進行しているように見せかけることができるということである。ブログは時々思いつきで書き散らされる傾向が強いので、全体的なまとまりは失われがちである。それに対して、リンクを所定日に公開していく形式は、見た目はブログと同じであっても、実は事前に計画を作っておくことができるため、トータルでのまとまりも作りやすい。アドベント・カレンダーのスタイルを借りながら、そうした仕込みのもとで企画を進めることができるという意味で、多くの可能性が感じられる。

もっとも事前の構想が不十分だと、結果的には二十四個の記事が無秩序に並ぶだけになって新機軸の効果も現れない。前述のサイトには、今年もたくさんのアドベント・カレンダーが作成さ

れているが、そのほとんどは場当たりにテーマを設定しただけのように見受けられる。その意味では参考になるものはほとんどないと言わざるを得ないのだが、日次に従って記事が公開されるスタイルは、期待値だけでいうなら決して小さいものではない。

というところで、ひとつアイデアを出してみたい。新聞の折り込みチラシでよく見かけるが、スーパーの広告には曜日別の特売品をアピールするものがある。月曜日は精肉の日、火曜日は魚介類の日、水曜日は野菜の日とかのアレである。あのスタイルは曜日とサービスピ目に対応させているわけだが、それを日付と記事との対応という形にアレンジして、日毎に順次オープンしていくように設定するわけである。物販店のPR目的で作るとすれば、一日は商品Aが半額、二日はBが半額……といった形になるだろうし、イベント告知に利用するのなら開催日時や会場などの要項を小分けにして順次公開していく形式にすることができる。PR目的のものではなく、映画や小説のような創作物に対する評論風の文章であっても、梗概から始まって登場人物の紹介などセクシオンを順次並べることになるので援用はできる。

とはいえ、実際のところは試しにでもWEB版イベント・カレンダーを一つでも作ってみないことにはわからない。それにアドベント・カレンダーそれぞれ自体への誘導ができるかどうかも問題になる。最近の流行でいえばツイッターやインスタグラムなどのSNSが個人とWEB空間とを繋ぐ有力な架け橋とされているのだが、ちっぽけな投稿がすぐさまに反響と結びつくはずはない。

それでも何かの企画を始める時の手段の一つとして、イベント・カレンダーなるものを知って置いて損はない。



元号予想（1）

二〇一七年最後のビッグニュースは、今上天皇退位の日程が決まり、平成の終わりが確定したことだろう。来年の五月には次の元号になっているわけだが、新元号が決まるのは今年の夏頃だとか。その頃になると事前予想も盛り上がってくるに違いない。とはいえ、候補の中から選ぶわけではないので的中させるのは至難の業だ。それに競馬予想じゃないんだから、仮に的中したとしてもエツヘンと自慢することにはかならない。そんなことは十二分に分かつてはいるが、それでもやはり一口噛んでみたい話題である。

ルールはいくつかある。まず国民や国家の理想を表現するに相応しい二字の言葉で中国の古典に由来をもつこと。次に読みやすく書きやすい、つまり平易であること。そして会社の名前などですでに使われている固有名詞と重ならないことなどである。もちろん、以前に使われたことのある元号や故人に捧げる称号（諡）はNGである。ここへもう一つ加えれば、アルファベット表記した際にM・T・S・Hから始まらないという条件も加わる。これは書類等で略記する習慣が定着していることを鑑みて、明治・大正・昭和・平成との混乱を避けるのが目的らしい。

さて、これらを踏まえたうえでの検討だが、まずは国民や国家の理想とはなんぞやといったところか。ただこれは極めて曖昧かつ抽象的なものの方がいいのだから、世界平和とか万民幸福とかに繋がるものならOKだろう。中国の古典に由来するという話は面倒そうな条件だが、二字熟語になる漢字というのなら他に探す場所はない。日本漢文など漢字を用いた他国の文献にあたるたところ、それ自体の出典になっている漢籍があるに決まっているから、結局は中国の古典に行き着く。ただし、理想を表現するような言葉だから、四書五経をはじめとした儒教の文献を中心に探すことになる。

一応の確認作業として、過去の元号とその出典を調べてみると（調べると言ってもWEBでポチッとやれば調査結果はすぐに表示される）、以下の通りである。

平成…史記「内平外成（内平らかに外成る）」または書経「地平天成（地平らかに天成る）」

昭和…書経「百姓昭明万邦协和（百姓昭明にして万邦协和す）」

大正…易経「大享以正天之道也（大いに享りて以て正しきは天の道なり）」

明治…易経「聖人南面而聽天下嚮明而治（聖人南面して天下を聴き、明に嚮いて治む）」

明治以降でいえば『書経』（尚書ともいう）と『易経』（周易とも）の比重が大きいようだが、その前の慶応は『文選』だそう、四書五経でなければならぬわけではない。

次の平易というのは、実は難しい課題である。内容的にいくら立派なものであっても、誰も読

めない書けないではお話にならない。したがってあたり限りで画数の少ない文字が重宝される。そういう観点では、平成や大正は理想的な文字だったのだろう。その次の一般に使われていないというのは、たとえば協和発酵や作新学院などの名前を引き合いにだせばいいだろう。昭和の由来になった「百姓昭明にして万邦協和す」に見られる協和という言葉を名前に用いたのが協和発酵工業株式会社であり、作新学院の場合は『大学』の一節である「新民を作す」に拠る。他にも企業名、高校名、大学名などにあたれば四書五経に由来する名前はたくさん見つかる。新元号を考えるにあたっては、こうしたすでに存在する名前との一致は避けねばならない。識者より候補が挙がってきた段階で、登記情報が調査されて既存名の有無がチェックされるはずだ。ただし商標ならデータベース化されているので調べられるのだが、私的な団体名や雅号のしらみつぶしは難しい。歴代天皇の諡など有名なものともかく、そうでないものには手が回らないと思う。結果、発表された後に「その言葉は昔から私が（我々が）使っていた」という声上がるのは避けられない。

つらつらとご託を並べているが、そろそろ具体的な文言を挙げてみる。的中させるのは宝くじを当てるぐらいの難しさでも、買わないと当たらないのと同じように、案を出さないと的中確率はゼロになる。ということだと思いついたところをランダムに……。

【一】道光…易経・象伝益卦「自上下下、其道大光（上より下に下る、その道大いに光かな

り）

【二】安仁…易経・繫辞上「安土敦乎仁（土に安んじて仁に敦し）」

【三】万志…尚書・仲虺之誥「德日新、万邦惟懷、志自満（徳は日新たにして、万邦は惟れ懐し、志は自ずから満み）」

【四】立成…論語・泰伯「興於詩、立於礼、成於楽（詩に興り、礼に立ち、楽に成る）」

【五】悠天…詩経・王風「悠悠蒼天 此何人哉（悠悠たる蒼天、これ何人ぞや）」

とりあえず、めぼしい資料を適当に開いたところで目に留まった文言からランダムに五つぐらい作ってみた。全部が全部、先に挙げておいたルールをクリアしているわけではないが、はてさて、いかがなものだろう。

元号予想（2）

前回は平成が終わった後の、次の元号予想であれこれ遊んでみた。そのなかでいくつか前提条件を並べたのだが、その後、関連資料を調べてみると、いくつか遺漏があったようだ。

まず、遺漏その一。元号に用いられる漢字には、おおよそながらの範囲がある気配だ。もっとも、この言い方は正確ではなく、過去に元号で用いられた漢字を並べると限られた範囲に収束する傾向があるとした方がよい。

具体的には、永（29）、数字は回数、以下同じ）、元（27）、天（27）、治（21）、応（20）といった具合で、特定の漢字を中心に反復性が見られるというのである。とはいえ昭和の昭や平成の成は、使用履歴のない初めての漢字だったそう。したがって、この単漢字レベルでの反復使用というのは、絶対的なルールではないが一応の目安程度には意識しておいた方がよさそうである。ちなみに、前回、いい加減に並べた私案のうち、上下の両方とも十回を越えて使われていたのは安仁だけで、道光に至っては両方とも使用実績ゼロである。

次に遺漏その二。実はこれは非常に重要な情報と言ってもよいのだが、かつて候補に挙がりな

がら採用されなかったものが、機会を改めて採用されることが少なくないということである。いわゆる「未採用元号」のことで、近いところでは幕末の文久・慶應、あるいは近現代の明治・大正・平成はそれに当たる。この未採用元号に関しては、森鷗外が資料（「元号考」、慶應まで）を残しており、過去に挙がった候補を一覧することができる。たとえば慶應に決まった一八六五年の改元では、寿徳、明順、明建、建平、宝観、寛禄、平成など四十一の候補が挙がり、その中から慶應が選ばれている。同じく一八六四年の改元では明治ほか二十四の候補から元治が採用され、その前は十八候補から文久が選ばれている。なお明治は、文久が選ばれた時にも候補になっていたもので、未採用元号は何度でもノミネート可のようだ（明治は十一回、大正と慶應はそれぞれ五回ずつ候補に挙がっているらしい）。こうしたことを情報として入れておくと、漢籍からランダムに抽出したものよりも、未採用元号の方が可能性が高いと言えるのかも知れない。ちなみに私案の中には未採用元号はないが、悠天については上下が逆の天悠が候補に挙がったことがある。

さらにもう一つ加えるなら、出典は漢籍が絶対条件ではないとの話である。これは意味するところがよく分からないのだが、和書でもしかるべき文言なら出典となるということなのだろう。とは言っても漢字を並べるのだから、仮名文資料ではどうにもならないし、日本書紀だの王朝漢詩文だの五山詩だのを持ち出しても、文言の出典となる漢籍があるはずなので、結局のところは中国の資料になってしまうのではないだろうか。江戸漢文や明治漢文ぐらになると独創的に思

える用字もまま見られるので、四書五経を中心とした古典漢籍に典拠がないものをあえて探すことは、できなくはないのだろうが、とうてい有意義な作業とは思えない。

さて以上のような情報を新たに加えたうえで、再度、検討をすれば、前回に挙げた私案のうち、道光と立成は可能性が限りなくゼロに近い。他の三つのうち、安仁は上下とも頻出漢字なので保留にしてもいいが、万志と悠天はかなり難しい。一応、お愛想程度の弁護を付けるにしても、万志の方は既出四回の実績であり、悠天は前述したとおり未採用元号の天悠に似ているのが救い、といったあたりが関の山である。というわけで、改めて候補を探すことになるのだが、まずは未採用元号の中から気になるものというところで、

和平…易経「聖人感人心、而天下和平（せいじんじんしんかん 聖人は人心に感じ、てんかわへい 天下和平たり）」

を挙げておく。きわめて一般的な熟語のような気もするが、現代的な視点でも理想を表す文言といえるし、分かりやすく書きやすい、それにWで始まる点は明治以降の元号との混同は起こらない。

ちなみに、和平の和は、過去の元号では十九回、平は十二回ほど使われていて頻出の部類に入る。また二字を組み合わせた和平が候補に挙がったのは、江戸期以降を調べた範囲では、寛政が採用された一七八九年を最初に六回ばかり確認できる。平成がそうだったように、落選履歴が少なくても採用されることもあるので、ノミネート回数は関係ないといえればそれまでだが、七度め

の挑戦で陽の目を見るとすれば、それはそれでドラマチックである。

芥川だより九十七号(二〇一五年二月)〜百三十三号(二〇一八年二月)

埋め草(増補版)

© 大江雉兔, 2020

二〇二〇年十二月三十一日 第一刷発行

著者 大江雉兔

発行者 秋水慧

発行所 オフィス 34

京都市下京区天使突抜二丁目三九四番地 一

オフィス34 山紫水明文庫

はじめての奥駈 (山紫水明文庫) Kindle版

苔迪散人 (著)

京都クルーズ・ザ・プロジェクト (編集)

埋め草 (山紫水明文庫) Kindle版

大江雉兔 (著)